

骨髄採取後、後腹膜血腫ができた事例

2000年9月、非血縁骨髄ドナーからの骨髄採取において、かなり大きな血腫ができるという健康被害が発生しました。

【経過】

骨髄採取終了後、ドナーが下腹部痛を訴え、CTスキャンなどの検査を実施し、後腹膜部位に血腫があること(腹膜と腹壁の間の部分に出血した血液の固まりがあること)が確認されました。ドナーのヘモグロビン値は一時、6.7g/dlまで低下(骨髄採取前のヘモグロビン値は12.3g/dl)しました。その後、ドナーの貧血は輸血なしで回復し、社会復帰されました。

【対策】

当財団では、全国の採取施設に対し骨髄穿刺の部位と深さに十分注意するよう「緊急安全情報」を発出し、事故調査委員会において原因調査及び再発防止策を検討しました。

その結果、採取針により腸骨の内側にある血管を傷つけた可能性が大きいとしながらも、出血が起こった部位とそれを引き起こした原因を特定することはできませんでした。

[緊急安全情報 \(PDF\)](#)

[安全情報\(報告\) \(PDF\)](#)